

火車小次兵衛	吉田玉助
前田庄司	吉田玉助
几帳の前	
慶壽院	豊松東十郎
母おさん	
わしの善次	

といふ風になつてゐる。これを「風鈴付中軸」と稱へてゐて紋十郎、東十郎が風鈴一字といふのです。

七、人形の發達と人形遣の風俗

こゝまでのところで、番付に對する一わたりの説明は致したと心得るので、つゞいて人形に關するお話を進めませう。

今日の三人遣ひにまで發達した人形の最初は何んなであつたかといふと、年代は詳かではありませんが傀儡師の人形から出てゐる。傀儡師が胸にかけた筥の内から今日の人形が飛出したのです。例の西宮の

引田某を目貫屋長三郎が、その淨るりに合はせ後陽成天皇の勅覽に供し、傀儡師が「淡路掾」を受領した。これが人形遣ひの受領の始めだと申すのが、今日までの説ですが、人形遣が受領したのではないらしい。

こゝで人形の四百年の歴史を説くことを避けますが、この傀儡師が淨るりと合致して、今日でいふ三業の一つとなるには、筥から飛出した人形が、所謂一人遣ひの人形であつたことが久しいのです。確實な一例が元祿十六年の竹本座の手摺にかゝつた、世話物の始まり「曾根崎心中」の繪を見ましても、辰松八郎兵衛がおはつを一人で遣つてゐます。この稿の第一回に掲げた「重井筒容鏡」のおふさも徳兵衛も一人遣ひで出遣ひであつたことは、あの寫眞を御覽になれば判ります。

この一人遣ひの人形が發達して、今日の如く三人遣ひになつたのは、享保十九年十月十五日竹本座に初日を開けた「蘆屋道滿大内鑑」の時からで、この興行には與勘平、野千平の人形の足、左を遣ふ者を別に舞臺に出し、又與勘平の腹のふくるゝやうにした。これが三人遣ひの始めでした。即ち竹本座の座本の竹田出雲が、興行的才覺から眼に訴へる舞臺並びに人形の發達を急速に促したので、これを助けて人形の工風を主としたのは吉田文三郎——今日の「吉田」を名乗る藝の元祖がそれでした。尤もこの前年の享保十八年には、人形の指先の動く工風がついた。「車邊合戦櫻」といふ淨るりで、「太平記」の世界で

大森彦七の指先が始めです。これまでは五本の指が動いた、目が閉じた、口が開いた、目が動いたと、段々と工風がついて來たので、享保十二年の豊竹座の「攝津國長柄人柱」がこれらの始めでした。

つゞいて次の元文元年即ち享保二十一年の二月の竹本座では、「赤松圓心綠陣幕」で本間山城入道の眉が始めて動いた。そしてその遣手は吉田文三郎でした。同じ年の三月豊竹座では「和田合戦女舞鶴」が上演、この時の板額を遣つたのが藤井小八郎で、その人形の大きさが普通の二倍がものがあつたと申します。今日「日向島」の景清、その他大きい人形がありますが、グイと大きく、板額とか景清を大きくして、淨るりの人物の個性を人形に表象させたのが、この藤井小八郎が始めでした。

それはとにかくとして、要するに享保の末から、今日の人形が發達する芽が見え出したといふ順序です。ところで人形遣ひの黒子くろこを着ない、謂ふところの出遣ひを非難する人のある事をこの頃よく聞きます。今日となつては、私も大賛成の一人で、舞臺における「黒色」は凡て「無」を意味する約束である。闇の夜の背景が、「黒布くろぬの」一枚で表徴してゐるのは古典藝術にふさはしい。これと同じに、黒子を着た人形遣ひは、看客の視覺を逸づれて、人形のみが百目蠟燭の灰の暗い光りに照らされるといふのが、どうも人形の味ですが、今日の如く電燈の晃々たる脚光の前に、派手な色上下で人形遣ひが出てゐるのは、不條理であることは勿論ですが、歴史を按ずると、寶永二年の竹本座、及び享保十九年の豊竹座で

「北條時頼記」が二度目に出た時に、既に藤井小三郎、藤井小八郎、中村勘四郎などいふ人形が——どんな程度かどんな服装であつたか知りませんが、既に「人形出遣ひ」をやつてゐます。尤も一人遣ひの人形を見ますと、辰松八郎兵衛のおはつにしる、吉田文三郎の「重井筒」の徳兵衛にしる、上下なしの袴で出遣ひに類した繪に見受けまます。最も昔の人形の手摺は、高くて人形遣ひが、手摺裏で人形だけをのぞかせて遣つてゐる。この高い手摺が低くなつて、人形遣ひが出て遣ふといふ「出遣ひ」と、今日いふ「出遣ひ」とは、言葉が同じで言葉の内容が違つて來ます。

ところで、人形の方の傳説によると、黒子は狩衣の袖を形どつたもので、貴人の前の演出に、狩衣の片袖を冠つたのが始めだと申しますが、どうあらうか。又昔のすつばの風俗も黒子のやうなものを着てゐるといふので、人形遣ひは黒子の寸法を、すつばと區別するやうに定めたなどいふ傳説も傳つてゐますが、とにかく黒子の寸法が定つてゐることは事實です。

黒子は冬は木綿、夏は麻といふのが原則で、身分によつてはびろうど、紋襦子などを贅澤に用ひたのは後世のことです。頭巾は麻に限つて、顔のところ一本鯨で鼻筋に骨があります。後には黒絹を用ひたのもありますが、大抵は麻、三尺五寸が決まり寸法、これを二つに折つて袋にする。二尺五寸を前に垂らして襟の見えぬやうに冠り、一尺は後ろに廻ります。

これが人形遣ひの普通の今日の服装で、一等むづかしいのは、麻の上下を使つた時ですといふが、これは昔のことで、いろ／＼派手な色襦子や何かで早替りなどをする、これは主として明治四五年から以降の人形遣ひの傾向です。近時人々が「禁じたい出遣ひ」といふのはこの種の服装でせう。勿論賛成。人形遣ひにはすと、誰れが遣うてゐるかお客さんに判らぬと申しますが、人形さへよければいゝ、それが第一です。遣ひ手が八兵衛であると太郎兵衛であるとは問ふところではありません。

この人形の黒子の腰紐は、赤色の唐縮緬が普通ですが、景容から淺黄を用ひる人が多くなりました。この紐の長さが二尺五寸、びろうどの黒子の時は金糸の紐ですが、これは「古老」以上しか着ることが許されませぬ。

舞臺にはく下駄は、五番、即ち五通りあります。一番が三尺の高さ、二番が二尺五寸、三番が二尺、四番が一尺、五番が五寸といふので、一番の下駄をはいてゐるのを二階段敷などから見ると蜜柑箱に鼻緒がついてゐるやうです。これは一番から五番まで人形の種類——即ち大小に應じてはくのです。この下駄をはいて人形を釣上げてゐないと、足を使ふ人が舞臺を四遣ひにならねば遣へません。人形の手摺、即ち舞臺前の人形遣ひの腰から下を隠してある「勾欄」これが三尺五寸あります。説明するまでもないと存じますが、三人遣ひの今日の人形は、その人形の責任者、その人形の遣ひ手が、人形の背から左手

を人形の胴に挿込んで、「人形」の位をつけてゐる。右手は「人形の右手」を動かしてゐるのです。「左つかひ」といふのは、その人形の左手ばかりを専門に遣ふ人をいひます。今一人は兩足を使ふのですがこれは「足遣ひ」といつてゐます。昔は「左」ばかり、又は「足遣ひ」ばかりを専門にした、一生左ばかり、足ばかりを遣つた足の名人、左遣ひの名人がありました。今日ではもう時がそれを許さない。馬鹿々々しい人の目につかぬ足ばかり遣つて一生を暮すには、今の人間は個性がありすぎるのです。だから今日では人形遣ひの修業は、後ろの「小道具收め」を第一、次が足遣ひ、それから左遣ひ、次が人形の本體の胴を持つ一人前と、階級が自然に決りましたが、昔は一生足も遣はず、左手ばかりを遣つて死んだ人が多い。殆どそれが専門なのです。

ところで、後ろの「小道具收め」と申しましたが、これが修業の第一歩で、狂言々々によつて入用の小道具の出入です。この小道具の出入が何の狂言でも差支へないやうに、寸法が實地について會得するのが、まづざつと三年、足の修業が又三年、左遣ひが又三年、約九年の修業を積んでやう／＼「一人前の断出し」といふ事になるのですが、「道具收め」の三年は、餘程の努力をしてゐます。でないと狂言の幕毎の寸法が腹には入らないものです。人形遣ひの苦しい間はこの馬鹿々々しい「道具收め」の間で、大抵のものはこゝで厭氣がさしてしまふ。今日人形遣ひの弟子入りが殆ど絶対にないといふのは、その生

活を保證さるゝことがむづかしいのも一つの原因だが、この修業が並大抵でないといふことが、一つの大きな原因です。事實もう文樂座に新しい人形遣ひの鳳雛ほうすうでなくとも、雀の雛さへも、この九ヶ年間に入門したものが無いといふ事實は、この修業に對する報酬が、算盤のけたけたにもかゝらぬからです。

按うても御覽なさい。人形遣ひ、左遣ひ、足遣ひの三人が、ピッタリと呼吸いそぎが合はねば人形は動かない。一つの魂のある如くに、人形を三つの頭脳を通して運動するのです。練習以外に動くことさへもがむづかしいといふのが、「人形遣ひ」の藝です。

三つの頭脳を一つの運動に一致さす楔くさびはどこにあるか、これには二つの目安めやすがあります。

第一、凡ての人形は三人とも人形の頭を唯一の便りにして遣ふこと。即ち足遣ひは下から、左遣ひは左から、胴を握つてゐるものは背から凡て人形の頭に精神を集中すること。これが第一の目安。

第二、人形遣ひの立つてる腰に、足遣ひの左腕がピッタリと當つてゐる。——この人形遣ひの腰のひねりが、足遣ひの腕に傳はるので足づかひは足の出し方が判るのです。この二つが原則的の目安で、三人ともこの二つ。——即ち人形の頭の動きと、人形遣ひの腰のひねりとが楔となつて人形に魂が入るのです。人形の眼の向く方へ左手がいつも心をつける。足は腰のひねりが、左が動けば左へ足を出す、といふこの呼吸一つです。そして人形遣ひは後ろから人形の形をつけるのですから、教へて教へられない

學んで學べない、實際に當つての修業を第一の商賣とする至難な業です。

だから人形の方では「死んだ目だまを指先で生かす」とか、「死んだ目で物を拾ふ」とか諺になつてゐます。目の行く先と手の先と、左の手の先の動かしとその目とが一致せねばならぬ。この三人の三拍子が揃はねばならぬのです。で、人形の運動で一等むづかしいのは手を拍つことである。一言にすれば、「目の付け方」一つで三拍子が揃つて手が拍てるのですから、この呼吸一つがむづかしい。この運動だけではそれのみで藝にはなれぬのですから全くむづかしい商賣、むづかしい藝道です。

先代の玉造といへば大しい名人であつた。近世での名人ですが、この人がよく「カーアア」と呼吸を入れたものです。ほんとは人形ですから、人形遣ひは魚の如く、無言でなければならぬが、どうしてもこれ位のかげ聲は仕方がない。太夫とのイキも、これ位の掛聲は自然に必要なやつてくるのです、

全く人形と淨るりと三味線とは、呼吸一つ、間一つです。名人團平は間のやかましい人でしたが、或る時、「先代萩」の政岡の米洗ひの間などは、左の手で棹をすらして一々左掌を膝においたことがあるのは、「間」を取つてゐるのですが、新作、或は改作になると、團平が三味線の手を人形が動けるやうに付けてありますと主張し、人形の玉造は、どうしても人形が動けない、その「ツン」とか「シャン」とかを拔差してくれといふことで、よく徹脊名人同士の議が合はないで、何れも下らなかつたといふ逸話が

澤山ありますが、それらは茲では省いて申しませんが、古人が幾百度今日までやつてゐるか知れぬが、どうにもならぬ珍しい「間」と人形の動きとの一挿話を茲に挿んでおきませう。

それは「千本櫻」の鮮屋の段の、梶原と權太のくだりです。梶原が「コリヤ權太」といふところで、何んとしても三味線の手がこゝで、「間」があるのです。こゝの引かゝりがどうにもつかぬので、魚の如く黙していゝ筈の權太の人形遣ひが、「何ぢや」と一言いひます。人形遣ひが辭を發するのは不都合ですが、この權太の「間」ばかりは、そのまゝでは舞臺が散りますといふのが、人形の「間」のむづかしいところ。

この「千本櫻」の書卸しは延享四年の霜月ですから、ざつと百七八十年、それでこゝの「間」がそのまゝであるが、書卸しの太夫はこの「三の切」は竹本此太夫、三味線は友次郎、權太の人形は吉田才治が遣つてゐるが、どう使つたかどう語つたか知りたいものだといふのはいつも思ふのです。

八、人形遣の修業と其専門

人形遣ひのことをざつと述べましたが、人形を三人一致して動かすこと、その事だけでも並々ならぬむづかしい藝ですから、人形遣ひばかりは中年からの修業は殆んど不可能です。太夫だと、好きから八